

第8回山の気象シンポジウム*

日時・6月13日(土)午後1時

会場・気象庁第1会議室

1. 春の北アルプスの気象観測

三共製薬山岳部 桑野 晴光

昭和35年4月30～5月3日にかけてアルプス洞沢周辺に春山合宿を行った。これはそのときの気象観測をもとに、天気図と山の気象の関係を調べた報告である。

2. 昭和38年夏山の気象報告

気象協会 城所 邦夫

気象協会解説予報部では昭和38年7月1日から8月31日まで、夏山の気象解説のため、8ヶ所(白山、立山、白馬岳、槍ヶ岳、上高地、木曾駒、塩見岳、谷川岳)の小屋に委託観測所を設け、1日1～2回の観測を行った。また協会名古屋支部は乗鞍岳で1日3回の観測を行い、これらの記録を電話にて毎日東京の協会へ通報を行なった。これらの記録から昨年夏山の天気変化の概略を報告する。

3. 早池峰山気象報告(第2報)

京王学園 小岩 清水

第2報は早池峰山で38年夏期と39年1月に調査した結果である。ここでの主題は早池峰山の気流と地形、およびその影響で変化する高木限界(森林限界)である。またハイ松、シラビソの偏形樹について、さらに岩手山の気流、植生と早池峰山の変化も報告したい。冬季の着氷帯と積雪帯が地形によりハッキリ分画され、その積雪帯は森林が上昇しているなど、雪、気流、地形の相互関係は興味ある問題と考えている。

4. ポスト、モンスーン期における東ネパールの気象(シャルブ峰の気象)

都立大 高橋忠太郎

都立大学と大阪府立大学の合同遠征隊は昭和38年10月12日から12月5日にかけて、ポストモンスーン期の東ネパール、シャルブ峰の登頂に成功した。ここではその間の気象記録を報告し、あわせてヒマラヤにおけるプレモンスーンとポストモンスーンの気象的差違を論じたい。

5. 空中写真による積雪深となだれの調査

建設省国土地理院 五百沢智也

38. 1 豪雪の際、撮影した空中写真およびそれにより作成した積雪深分布図、なだれ分布図、等高線図などについて紹介するとともに、それらの資料から積雪深の分布と、地形・風向・植生との関係について、ならびになだれの発生地点の地形条件についての2つの課題に関するこれまでの作業を報告する。

6. 家型テントの耐風強度について

気象協会 吉川 友章

38年4、5月、テントメーカーの依頼により、家型テントの風によるゆれの特性と倒壊に至る機構を測定し、テントの方向別強度や限界風速を求めた。その結果、張網なしで縦方向に平均11m/s、横方向に7m/sをこえる風が連続して吹くと、たわみの振動中点が徐々にずれていつかは倒壊する危険がある。さらに縦方向に平均26m/s、横方向に15m/sをこえる風が吹くと、振動をくりかえす余地のないほど急速に倒壊することがわかった。

7. 山の遭難と気象の統計

明大山岳部 末松 誠

昨年明大山岳部遭難対策委員会として、これまでの山の遭難を分析し統計したものをまとめ発表した。ここではこれらの遭難統計とその後の資料から、遭難の直接原因と気象との関連性などを報告したい。

8. 富士山の気象(第7報)―富士山の遭難と気象―

船津測候所 山本 三郎

明治、大正、昭和の三代にわたる富士山の遭難事故の記録から、その原因を調べ、気象条件が富士山の遭難事故にいかにか大きな要因を占めているかを述べる。

9. ヨーロッパより帰って(スライド)

気象庁 大井 正一

先程1年間の西ドイツ出張から帰国した。その間ヨーロッパ各地を廻ったがその記録から、とくに山の気象に関係ある部分のスライドを紹介し、彼地の山の気象研究の実情などを報告したい。

10. 総会

* The 8th Symposium of Meteorology for mountaineering

—1964年4月25日受理—